

## はじめに

英語の学習に関しては夥しい数の書籍があります。これもその1冊になります。われわれも、これまでも多くの英語関連の本の出版してきました。検定教科書、辞書、文法書、教授法など、応用言語学者として幅広いトピックを扱ってきました。今、自分たちがしてきた仕事を振り返り、もし新たな1冊を足すとすれば、何を書くべきか。このことについて2人で議論しました。

そして、1つの結論に達しました。それは、英語教育の「エッセンシャルズは何か」を突き詰め、その結果を読者に提供するという事です。名詞の“essential”を辞書的に定義すれば“basic things that you cannot live without” (Cambridge Dictionary) あるいは“a thing that is absolutely necessary” (Oxford Dictionary) となります。「絶対に必要な何か」ということです。

エッセンシャルズを明らかにするためには、肝心要の「英語力とは何か」を明らかにする必要があります。英語教育の目標は、端的に、学習者の英語力を高めることにあるからです。英語力とは何であるかが明らかになってはじめて、それを構成する要素としてのエッセンシャルズを引き出すことができるというのが、われわれ筆者がたどり着いた結論です。

英語教育改革の必要性は、指導要領の改訂のたびに叫ばれてきました。そして、今、その「声」の勢いがとりわけ強いように思われます。それに呼応するかのよう、英語教育の現場でも、新しい英語指導の在り方を模索する動きが加速化しているように思います。グローバル社会の中で、自らの人生を切り拓くには、真に使える英語力が有用だからで

# 目次

はじめに .....	3
<b>■ Chapter 1 英語力とは何か 13</b>	
指導要領の狙い .....	13
英語力：タスクハンドリングと言語リソース .....	14
4 技能と表現モード .....	15
タスクの具体例 .....	17
can-do と can-say が両輪 .....	19
言語リソースの3つの力 .....	20
<b>■ Chapter 2 語彙力とは何か 23</b>	
語彙力とは何か .....	26
語彙力の定義 .....	27
<b>■ Chapter 3 基本語力を身につける 29</b>	
基本語力 .....	29
基本語力が弱い .....	30
基本動詞の意味の捉え方：run を事例にして .....	32
使い分け .....	33
基本動詞の学び方 .....	35
意味形成の原理 .....	37
コアイメージの適用範囲 .....	39
基本動詞の教材の作り方 .....	42

<b>Chapter 4 拡張語彙力を育てる 49</b>	
拡張語彙力養成エクササイズ.....	52
ポキャチェーンの発想.....	57
<b>Chapter 5 文法は学ぶ必要があるの? 61</b>	
学校の英文法.....	62
現行の学校英文法の問題点.....	63
英文法の棚卸: 5文型を事例にして.....	63
不可欠な共演情報は何か.....	65
補語と目的語の意味.....	66
第4文型の問題.....	68
「目的語」のさらなる考察.....	69
動詞の構文的可能性.....	70
全体像の欠如.....	71
<b>Chapter 6 文法の全体像を示す 73</b>	
表現英文法の世界.....	73
名詞の文法.....	74
動詞の文法.....	79
副詞の文法.....	83
情報の配列と構文.....	86
英文法力.....	87
<b>Chapter 7 文法指導の原理 89</b>	
どう教えるか.....	89
教師が英文法の本質を理解する.....	97
<b>Chapter 8 口頭で文法力を鍛える 101</b>	
Grammar in Chunking の事例.....	102

比較級の指導もチャンキングを使って .....	106
おわりに .....	110

## ■ Chapter 9 慣用表現を学ぶ 111

慣用表現の性質.....	111
慣用表現のタイプ.....	112
「慣用表現力」という考え方.....	118
慣用表現を学ぶ.....	119
慣用表現のプレハブ効果.....	123
会話の流れを調整する慣用表現.....	124

## ■ Chapter 10 慣用表現の指導のための事例 127

断る・反論を述べる際の慣用表現.....	127
一言前置きをする際の慣用表現.....	135
発話に向かう態度.....	137
話題の幅を設定する.....	137
内容に対しての感情的反応を示す.....	138
確信の度合いを示す.....	139
発話に対して態度を示して話す訓練.....	141
話題を調整する際の慣用表現.....	142
話題を導入する.....	143
話題の変更.....	145
話題の変更を望まない.....	147
話題の回避.....	148

## ■ Chapter 11 まとまった内容を発表する力を鍛える 151

表現者になる.....	151
タスクを意識する.....	153
プロダクション力を鍛えるための方法：Navigator in Speaking.....	156

ストックとフロー .....	156
NIS の具体的な仕組みと内容 .....	157
人物描写 .....	158
眼前にある日本固有の何かを説明.....	161
眼前にない日本的なものを説明 .....	162

## ■ Chapter 12 英語は音だ 167

ブロークンイングリッシュ .....	167
音作り：口作りと口慣れ.....	169
どうすればよいのか？.....	169
音の聞こえ方 .....	170
口作りは音慣れと裏腹の関係.....	172

## ■ Chapter 13 英語力養成の土台となる音声表現力指導 175

「音声」の重要性.....	175
発声のための口作り .....	176
口慣れには音慣れが .....	177
生徒の学習効率化と「アンカー音」への絞り込み .....	179
「母音」アンカー音の指導と練習：口作り .....	180
「母音」アンカー音の指導と練習：口慣れ.....	182
「子音」のアンカー音の指導と練習：口慣れ .....	184
音声英語ではリズムが重要 .....	185
口慣れからさらに進めて、本格的な音読：チャンキング音読法 .....	187
リピーティング、オーバーラッピングそしてシャドーイング .....	190

## ■ Chapter 14 英語教育の争点 193

英語はできて当たり前.....	193
バイリンガルであることのメリット .....	194
自分で納得するのが一番.....	195

年齢と外国語学習の関係 .....	196
学習環境 (learning context) と年齢と第二言語学習 .....	197
それでも外国語学習は若いほうがよい .....	198
英語教育の成功の条件 .....	199
文化適応の問題 .....	200
学習支援の必要性 .....	201
英語は誰でも身につけることができるのか .....	203
個人差 .....	204
日本人は英語が苦手 .....	205
英語力の育成を阻むもの .....	207

## ■ Chapter 15 英語教師の英語力 211

教師の英語力 .....	211
生徒の発言にフィードバックを与える：教室の雰囲気を作る .....	212
英語で活動させ、それに誤りなどの訂正を行う .....	213
内容の理解と新出単語や文法の説明 .....	215
おわりに .....	219

# Chapter 1

## 英語力とは何か

英語の学習というと、すぐに単語を覚えるとか文法問題が解けるようになるとか英文の読解や聴解、さらには英作文とか口頭発表などができるようになるなどを連想する人が多いと思います。そして、何のために勉強するのかと聞けば、英語が使えるようになるためだと多くの人は答えるでしょう。しかし、実態はどうでしょうか。教科書の中、問題集の中、そして試験の中に英語を閉じ込めているのではないのでしょうか。生きた言葉としての英語としてではなく、「学習対象としての英語」という捉え方が主流なのではないかと思います。

### ■ 指導要領の狙い

2018年の3月に新しい学校指導要領が発表されました。高等学校の場合、英語は、「コミュニケーション英語」「英語表現」「英会話」の3種類の教科書が現行では使われています。これが2022年から、「英語コミュニケーション」と「論理・表現」の2種類になります。「コミュニケーション英語」から「英語コミュニケーション」に名称が変化していることに注目してください。現行の「コミュニケーション英語」は「コミュニケーションのための英語」という意味合いで、英語の教育に重点が置かれます。一方、新指導要領では「英語コミュニケーション」になり、「英語でコミュニケーション活動を行う」というところに強調点が移っています。英語を学ぶから英語を使うへのシフトです。もっと

## Chapter 2

# 語彙力とは何か

英語学習において重要な項目は何かという質問に対して、教師も生徒も「単語の必要性」を挙げます。そして、英語学習で困っていることは何かという問いに対しても、「単語がなかなか覚えられない」がリストの上位に挙がります。確かに、語彙力がなければ何も話せません。

「英単語をいくつ知っていますか」と問うたとしましょう。語彙力がないと嘆いている人でも、少なくとも2、3千語ぐらいは知っているはずです。にわかには信じられない話かもしれませんが、日本語には、英語由来のカタカナ語がたくさんあります。

テニスやゴルフやサッカーなどスポーツ用語は英語をそのまま使う場合がほとんどです。「ブレイク (break)」「ラケット (racket)」「グリップ (grip)」「スタンス (stance)」「ショット (shot)」「ポイント (point)」「マッチゲーム (match game)」「クレイコート (clay court)」「アンパイア (umpire)」「バックコート (backcourt)」「ラブ (love)」「エース (ace)」などすべてテニスで使う用語です。

コンピュータ関連の用語も英語をそのまま使うのが一般的です。「バグ (bug)」「ソフトウェア (software)」「ダウンロード (download)」「リセット (reset)」「ギガバイト (gigabyte)」「オンライン (online)」などいくらかでも思いつくでしょう。色彩語などもその多くがカタカナ語(「モスグリーン」「ピンク」「ダークブラウン」など)ですね。また、新型コロナウイルスに関連した語句として、「オーバーシュート (overshoot)」「クラス

## Chapter 3

# 基本語力を身につける

### ■ 基本語力

単語の指導を行う際に、「基本語力」という概念をもつこと自体が**まず大事**です。というのは、概念は目標を定める効果をもつからです。換言するなら、「基本語力を育てる」という自覚をもったとき、はじめて、体系的に基本語の指導を行おうという気持ちになるのだといえます。

「基本語力」という概念がなければ、基本語のほとんどは中学校で学んだ「既知語」として処理され、高校生になってからも体系的な指導の対象になることはまずありません。なお、ここでいう基本語は中学校の英語で導入されるような単語のことをいいます。品詞的には、動詞、形容詞、副詞、名詞、前置詞、代名詞、接続詞などが含まれますが、その数は500語ぐらいだと思います。そして、その500語の中でも重要なのが**英語のエンジン部分になる動詞**(50語ぐらい)と**ハンドル部分になる前置詞**(25個ぐらい)であるといえます。われわれ著者は英和辞典の編者を務めた経験がありますが、そこで、面白いことに気づきました。通常、学習英和辞典というものは2000頁ぐらいの書物です。その中に約10万語の単語を載せるわけですが、500語ぐらいの基本語が占める割合は50%を優に超えるという気づきです。itやthatだけでなく、getやputやtakeなど基本動詞は数頁に及ぶ記述内容になっています。これは、基本語の表現力がいかに大きいかを物語っています。そこで、基

## Chapter 4

# 拡張語彙力を育てる

基本語力が語彙力の基盤だとしても、いろいろな話題や場面について語る単語を知らなければ表現力は限定されます。たとえば、court of justice – trial – proceedings – lawsuit – judge の単語をリストすれば「裁判」を連想するでしょう。言い換えれば、以下のような単語を知らなければ、裁判について語るのは困難です。

裁判所 court of justice	起訴 prosecution / indictment
裁判 trial (主に刑事裁判)	傍聴人 public observers
法廷 court	告訴 accusation, litigation
正義 justice	被告人 (主に民事訴訟) defendant
裁判沙汰 (court) proceedings	被告人 (主に刑事訴訟) accused
訴訟・告訴 lawsuit	証人喚問 witness summons
裁判官 judge	証言 testimony
*裁判所の裁判官全員を指すときには、 the court または the bench という。	偽証 perjury
裁判長 chief justice	虚偽 intentional lying
検察官・検事 prosecutor	冤罪 false accusation
弁護士助手／パラリーガル paralegal / legal assistant	罪状認否 arraignment
法律の専門家 jurist	未必の故意 willful negligence
	判決 judgment
	刑 penalty

## Chapter 5

# 文法は学ぶ必要があるの？

英語教育における文法の位置づけは必ずしも安定したものではありません。よく「日本人は文法ばかり勉強するから英語が話せない」ということを耳にすることがあります。「文法は本当に学ぶ必要があるのか」という質問もよく聞かれます。

確かに、「文法ばかり」だと英語は使えるようにならないでしょう。しかし、文法のない言語というものは存在しません。世界に何千もの言語がありますが、文法のない言語はありません。ある言語が使えるということは、その言語の文法力を身につけているということの意味します。

母語の場合には、知らず知らずのうちに、文法力を身につけていきます。通常、それは意識されることはありません。しかし、たとえば「お母さんは太郎を弁当を作った」という文を聞いたとします。日本人であれば、「これはおかしい文」とであると判断することができるでしょう。これが文法力というものです。つまり、「太郎を」ではなく「太郎に」でなければならないということがわかるはずです。なぜわかるのか。それは、私たちが文法力をもっているからにほかなりません。英語学習においても、文法力は英語力にとって必須であることは間違いありません。しかし、これまでの文法指導（学習）の仕方では文法力は身につくでしょうか。残念ながら、その答えは「否」です。

## Chapter 6

# 文法の全体像を示す

「従来の文法で何が問題か」と問われれば、われわれ筆者は、「全体像の欠如」問題を挙げます。個々の文法項目の説明は行われるものの、**項目が有機的に関連しあった文法の全体像**が示されていないがために、知識がバラバラになり、実際の運用能力にはつながりにくいという問題です。

文部科学省の学習指導要領（外国語）には、「英語の特質を理解させるために、**関連のある文法事項はまとまりをもって整理する**など、効果的な指導ができるよう工夫すること」とあります。これは重要な視点です。指導要領で指摘する「まとまり」は部分的な集合ですが、以下、われわれは、ここで示唆されている方向性をさらに進め、筆者らが考える表現英文法の全体像について述べていきます。

### ■ 表現英文法の世界

私たちが世界を英語で語るための文法のことを「表現英文法」と呼びます。ここでいう「世界」には私たちの外の外的世界と私たちの内の内的世界が含まれます。日常の出来事や世界の出来事は外的世界での事柄ですが、感情的反応をするだとか評価を行うなどは内的世界に関わる事柄です。

ここで提案する表現英文法は、比喩的に言えば、**3つの島とそれをつなぐ1つの経路で構成される世界**です。3つの島とは、モノ的世界を語る名詞の英文法、モノとモノを関係づけて出来事や状態、すなわちコト

# Chapter 7

## 文法指導の原理

文法がわからないから英語がわからない。これは多くの中高生の「悩み」です。実際、たいへん多くの生徒が比較級や不定詞や現在完了形といった文法項目で躓いています。「生徒が文法ができない」ということは、先生が文法を教えきれていないということでもあると思います。というのは、**教えることと学ぶことは表裏一体**だからです。

生徒にとってどうして文法が難しいかといえば、1つには覚えることが多くて覚えきれないということがあるでしょう。動詞の過去形や過去分詞形を覚えたり、形容詞や副詞の比較級や最上級の形を覚えたり、確かに覚えることはたくさんあります。しかし、覚えるだけであれば、徹底的に練習すればほとんどの生徒が課題をクリアすることができるはずです。むしろ、教え方次第で、「文法は簡単で、役立つもの」と生徒が感じるようになるはずです。

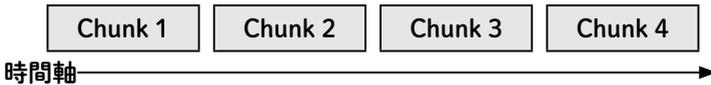
### ■ どう教えるか

文法はコトバを使う際の規則であり、どの文にも**文法の血が流れている**ということを生徒に実感させることが大切です。そのためには、**表現のために文法がある**ということ、**文法を知ると表現力がアップする**ということをきちんと計画をたてて提示することが必要となります。その際に、考慮すべき原則のようなものがあると思います。

# Chapter 8

## 口頭で文法力を鍛える

第6章で、表現のための英文法を構想するにあたり、モノについて語る名詞の文法、コトについて語る動詞の文法、状況について語る副詞の文法の3つを提案しました。そして、それぞれの文法が関与する名詞チャンク、動詞チャンク、副詞チャンクを表現単位とみなしました。表現は以下のように、時間軸に沿ってチャンクを連鎖化することで行われます。この連鎖化のことをチャンキングと呼びます。



たとえば、I don't know why she believed what Bill had told her. (ビルが彼女に言ったことをどうして彼女が信じたかは僕にはわからない) という文は、以下の3つのチャンクにより作られています。

[I don't know]

[why she believed]

[what Bill had told her]

チャンキングのプロセスに注目した文法指導のことを、Grammar in Chunking と呼びます。以下では、Grammar in Chunking に基づく、文

# Chapter 9

## 慣用表現を学ぶ

以前、ある出版社の編集者が英語の熟語帳を作成する際に、「どうせ熟語は単語帳の添え物のようなものですから」といいました。学校でも、熟語は覚えるしかないので、生徒各自に覚えさせており、体系的な指導は行っていないと報告する教師も少なくありません。大学生に聞いても、その教師の発言を裏付ける結果が得られます。つまり、彼らは中高時代に「熟語帳」のようなものを利用しながら、ひたすら暗記したといえます。中には、熟語は格好いいけど、なかなかうまく使えないという本音をもらす大学生もいます。せっかく覚えた熟語も丸覚えなので、早晚、記憶もあやふやになり、使えるどころではないというのが正直なところでしょう。

ここには2つの問題があります。その1つは、**熟語は英語学習の副次的なものなのか**、という問題です。そして、もう1つは、**熟語は丸暗記するしかないのか**、という問題です。われわれの答えは、いずれの問いについても「否」です。慣用表現力を身につけることは英語力の要です。そこで、この章では慣用表現について詳しく見ていきます。

### ■ 慣用表現の性質

どの言語でも夥しい数の慣用表現があります。慣用表現は、まさに慣用化された表現であることから、言語のやりとりという実践の中で、**反復して使用され、慣用表現を聞けば、意味が瞬時に理解できる**というも

# Chapter 10

## 慣用表現の指導のための事例

ここでは、慣用表現を指導するにあたり、日常行為における慣用表現の具体的な使い方を見ていきます。まず、注目したいのは「断る・反論を述べる」際の慣用表現です。

### ■ 断る・反論を述べる際の慣用表現

英語で会話をしていて難しい場面は、何かを断る場合と反論を述べる場合だと思います。どちらも、下手をすると相手の面子をつぶしたり、相手を不快な気持ちにさせたりする可能性があるからです。ここでは、上手に「断る」と「反論する」ためのやり方を見ていきます。その鍵になるのは慣用表現の使い方です。

### ■ 断る (refusing)

まず同じ断るといっても、「依頼 (頼みごと) を断る」と「申し出・勧めを断る」があります。まず、頼みごとを断る場合を見てみましょう。たとえば Rex が仲のいい友人 Jim に Could I borrow your car? (車貸してくれない?) と頼まれたとします。Rex は、はっきり No way! (ダメ!) と応じます。もちろん、一度断っても、相手が簡単に引き下がるとは限りません。

# Chapter 11

## まとまった内容を発表する力を鍛える

生徒が英語を真に使えるようにすること、これは英語教育の教科目標ですが、現段階で、この目標は達成されているとは言えません。では、どうすればいいでしょうか。これは教師一人ひとりが取り組むべき、難しい問題です。本章では、現状を変えていく方向性として、2つのことを述べていきたいと思います。

その1つは、教科書を理解し、問題集を解くという学習スタイルではなく、今もっている英語がどんなに小さなものでも、それを使って表現するという態度をもつというものです。つまり、生徒は「学習者」であると同時に「表現者」にならなければならないということです。そしてもう1つは、タスクを意識するということ、すなわち、英語でタスクを行うという意識をもつことで、本来のスピーキング指導につながるという可能性です。

### ■ 表現者になる

英語が話せるようになるには、自分の英語で表現しようとする態度をもち、それを実践することが肝心です。多くの生徒は、知らず知らずのうちに、テストで高得点をとることに関心が向かい、そのために、教科書や問題集を「目と頭」を使って学習しようとします。問題を解き、テストで高得点をとることができる生徒が「英語ができる生徒」とみなされてしまうのです。しかも、そういった生徒は、他の生徒たちからはも

## Chapter 12

# 英語は音だ

### ■ ブロークンイングリッシュ

英語は世界中で使われており、今ではたくさんのいわゆるお国訛りを聞くことができます。ロシア人の英語とアラブ人の英語ではだいぶ聞こえ方が違います。イギリス英語とアメリカ英語でも音調として聴き比べると、相当の違いがあります。韓国人の英語、フィリピン人の英語といった具合に、英語の使用者が世界に広がれば、その分、音の特徴も多様化します。こういう状況を踏まえて、「英語は国際語だからブロークンでいいよ」という論調を耳にすることがあります。

この「ブロークン (broken)」は標準英語の基準からみて「こわれている」ということですが、どこがブロークンかは一筋縄ではいきません。日本語訛りでしゃべる英語は音韻的にブロークンとみなされます。文法的にでたらめな英語もブロークンです。微妙なところでいえば、表現の選択が基準からは外れているため、ブロークンとみなされることもあるかもしれません。

面白いことに、この broken という形容詞は英語圏の幼児の英語には決して使われません。なぜでしょうか？ 幼児の英語は発達過程にあると考えられているからだという見解があります。発達過程は学習過程と同義なので、日本人の英語も米国の幼児の英語のように broken というのは不適切な形容詞のはずです。しかし、大人になってしまうと、「適切

## Chapter 13

# 英語力養成の土台となる 音声表現力指導

### ■「音声」の重要性

現在、英語教育の世界では、これまで以上に「音声」の重要性が再認識されかつ叫ばれるようになってきています。英語の習得にはやはり「音」が鍵となるわけで、発声・発音にかかわる「音声表現力指導」が大事だということです。しかし、現状はどうかといえば、音声指導という名目で、例文を数回繰り返し音読する、テキスト本文を音読するということが中心になっているようです。これでは、形式的に声を出しているだけで、その「質的な面」を重要視した「英語の口作り」が意識的に指導されているとはいえません。

音声に重きを置いた英語力（リスニング力やスピーキング力）を本格的に身につけさせることを英語教育の狙いにするのであれば、その最も大切な土台は、前章で述べたように効果的な「音声表現力」の前提となる「口作り」であるといえます。

確かに、生徒が英語で話す力を身につけるには、音読が有効といわれます。われわれもこの点については異論をはさむわけではありません。ただ目で黙々と英語を学ぶのではなく、絶えず口を使って学ぶという身体知に重きを置いた英語学習は、英語を話すうえでは不可欠な訓練になるからです。そして、音読はいつでもどこでも一人で気楽にできる訓練であるという利点もあります。生徒の音読活動が日常化してしまえば、

# Chapter 14

## 英語教育の争点

英語教育を巡っては、どうして英語を学ぶ必要があるのか、学習目標となる英語力とはどういうものか、英語力は誰でも身につけることができるのか、思春期前の子どものほうが思春期後の学習者より英語学習において有利なのか、単語を覚えても使えないのはどうしてか、文法は必要なのか、中高の英語教育は何が問題なのか、等々さまざまな論点があります。この章では、英語教育に関するいろいろな論争点を見ていきます。

### ■ 英語はできて当たり前

ここで、「なぜ英語を学ぶのか」ということについてお話していきたいと思います。中学3年生に「どうして英語を学ぶの？」と質問しました。その結果、「入試に出るから」「英語で映画を観たり、歌を聴いたりしたいから」「学校の授業で英語が教科としてあるから」「親に言われて仕方なく」「今や英語は世界中で使われ、これからの時代を生きるのに必要だから」といった回答が返ってきました。教師に同じ質問をすれば、最後の「英語は国際語だから」が目立つ回答だろうと思います。

確かに、本書の「はじめに」でも述べましたが、英語を実用的なレベルで使うことができる人は15億人ほどであるという推計があります。その内、母語として英語を話す人は4億人弱です。圧倒的多数の人が第二言語として英語を使っているということです。アジアでも、韓国では英語ができなければ生きていけないということから国策として英語教

# Chapter 15

## 英語教師の英語力

教師の英語力とは何か？よく英検で準1級以上だとか TOEIC で750点以上といった基準が教師に求められる英語力として示されることがあります。しかし、これは、教師の英語力を見るにはかなり荒っぽい指標です。なぜなら、英検で準1級をとることが、どういう英語力を保証するのが判然としないからです。昨今は、中学生で準1級をとる生徒も少なくありません。このことを考えれば英検の級が教師の英語力を保証するものでないことは明らかでしょう。

教師の英語力は高校生や大学生の英語力とは違うはずですが。教師に求められる英語力は、英語を説明するメタ言語的知識を含みます。英語の善し悪しを感じ取る文体的感受性も必要でしょう。授業を運営するには、生徒に指示を出し、活動の流れを調整し、活動についての評価やフィードバックを与える英語が求められます。もっといえば、生徒にとっての新出単語が出た場合、その使い方などを説明できる英語力が必要です。もちろん、文法も日本語を使わないで指導することができなければなりません。英文を音読することができることは当然です。これは、英語教師力の英語の必須項目とみなすことができますが、音読といっても情感を込めて読む力が必要です。

### ■ 教師の英語力

上記の通り、「英検準1級が教師に求められる英語力だ」といっても